

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島大学図書館蔵『源語しをり』考：「忍草」歌を含まない「源氏物語忍草」
Author(s)	加藤, 伸江
Citation	表現技術研究, 16 : 43 - 53
Issue Date	2021-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/50850
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050850
Right	
Relation	



広島大学図書館蔵『源語しをり』考

—「忍草」歌を含まない「源氏物語忍草」—

加藤 伸江

はじめに

広島大学図書館蔵『源語しをり』⁽¹⁾は、四冊からなる写本である。書名が『源語しをり』とあるのだが、本稿で示す桐壺巻の翻刻からして、本文は「源氏物語忍草」であった。序文がなく、ごく短い跋文があるのみで、「源氏物語忍草」という書名の由来となる「忍草」の歌が含まれていない。

本書は、現在、広島大学中央図書館貴重資料室に収められている。貴重資料室には、『源氏しのぶ草』(写本、二冊)⁽²⁾、『源氏物語忍草』(版本、五冊)⁽³⁾の所蔵もある。この三種の「源氏物語忍草」を比べると、冊数や巻の区切り、跋文などに相違が見られる。

「源氏物語忍草」は、北村湖春(一六四八〜一六九七)が著した源氏物語の梗概書とされる。成立が元禄初年(一六八八)頃⁽⁴⁾とされているが、成立から版本の序文執筆まで約百五十年あるという。版本の序文に「天保といふ五とせの水無月」という記述があるためで、版本の序文執筆が天保五年(一八三四)六月とされている⁽⁵⁾。成立から版本の序文執筆までの間「空白の百五十年」⁽⁶⁾とはいかなるもの

であったか。その間を埋めるべく「源氏物語忍草」の写本に関する報告が続けられている⁽⁷⁾。

ここに、『源語しをり』と題する写本を加えて、「源氏物語忍草」版本刊行に至るまでの写本流布期を埋める一片としたい。

一 本書の書誌

まず、『源語しをり』の書誌を示す。

写本四冊。縦二十四cm×横十七cmの半紙本。楮紙袋綴。原装と見られる茶色無地の紙表紙に、題簽に破損があるので推測となるが、縦十八cm×横三cmぐらいの無地題簽を左肩に貼り、「□語志越梨」「□語志越里」「□語之を利 三」「□語志をり 四」と外題。この書名が書かれた外題の右側に縦九cm×横十・五cmの無地の目録題簽にそれぞれ収録巻名を記す。見返しは本文共紙。巻のはじめの丁に巻名を書いた柱あり(ただし桐壺巻は破損であろうか、見えない)。一面十一行書き。巻名は本文より三字ほど下げて記す。和歌は本文より二字ほど



写真1：広島大学図書館蔵『源語しをり』第一冊表紙

下げて記す。下の句の末尾から本文が続く。墨付、第一冊四十六丁、第二冊四十七丁、第三冊四十八丁、第四冊五十八丁。全同筆だが、裏表紙に別筆で第一冊「以志多志つ古」、第二冊「石田志づ古」、第四冊「石田静子」と墨書あり、第三冊のみ裏表紙見返しに「石田静古様」と朱書あり。虫損が所々ある。表紙見返しに「広島大学図書」「国語国文学教室」の蔵書印がある。函架番号は「国文8841N」(モノ源21)である。

第一冊桐壺から漣標、第二冊蓬生から梅枝、第三冊藤裏葉から雲隠、第四冊匂宮から夢浮橋までである。外題に記された第一字が四冊とも

にそれぞれ破損して見えにくいのが、四冊の残存している箇所を総合して推測すると「源」としてよかろうと考える。

二 桐壺巻の翻刻および異同

《翻刻》桐壺巻

※底本のままを原則とした。丁数・行数を私に付した。傍書は「」に示す。

(二丁才)

1 桐つほ

2 いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給ひ

3 ける中にやんことなききははあらぬかすくれて時めき

4 給ふと巻にかきしか桐つほの更衣也此人は大納言の娘

5 なり大納言はとくうせ給へり此更衣かたちすくれ心さま

6 ゆうにおはしければ帝に奉りなは幸をも引出給はん我なく

7 成たりともいかにもして宮つかへに出せと父大納言遣

8 言なれば母きみとかくして御宮つかへに出し給ふに

9 帝御心さしたくひなく御てう愛なゝめならずさるに

10 依て弘き殿の女御をはしめあまたの女御更衣そねみ給ひ

11 てくねくしき事とも数しらす此弘き殿といふは右大臣の

(二丁ウ)

- 1 御娘なり人よりさきに参り給ひてことに此御はらに一の宮
- 2 いてきさせ給へはよせいおもき人也此弘き殿をは帝さへ憚から
- 3 せ給へはまして更衣は心くるしう明暮物のみ思ひてをのつ
- 4 から病氣に成給ふを帝いと哀におほす此御はらに玉
- 5 のをのこ御子むまれ給ふとかきしか源氏也此君三歳に成
- 6 給ふ夏御母更衣の日比の病氣おもく成かきりのさまに
- 7 見え給へは御いとま申て里へ出んとし給ふ帝名残おし
- 8 ませ給ひてさまくの事とものたまはせければ更衣
- 9 限りとてわかるゝ道の悲しきにかまほしきは命なり
- 10 けりとよみ給ふて車のせんし下さる此車は手にて引座
- 11 敷の内をのる也馳走におほさるゝ物ならてはゆるしを給はず

(二丁オ)

- 1 源氏をは内裏に置奉りて更衣はかり出給ふいかにゝと
- 2 御つかひ行かふに夜中過る程にはかなく成給ふと御使
- 3 帰りきてそうすきこしめす御心地何事もおほしわかす
- 4 御涙にくれさせ給へり源氏も御忌なれば里へ出し給ひて
- 5 更衣の母君に預け給ふ贈り号に更衣に三位のくらひ
- 6 をつかはさる帝御なけきにはるゝかたなくて明し暮し給ふ
- 7 風あらゝ敷吹夕くれにゆけいの命婦といふ女を更衣の
- 8 母君の方へ御使につかはさる御製
- 9 宮城のゝ露吹結ふ風の音に小萩か本を思ひこそや
- 10 れ命婦はゝ君と色ゝ物語して源氏の御やうたいをよく
- 11 見てかへるに更衣の手馴しくしはこなとを形見心に母

(二丁ウ)

- 1 君命婦にやり給へり帝は長恨歌の絵そうしを御覽し
- 2 て貴妃の別れを悲しみ給ひし玄宗のなけきに引くら
- 3 へいとゝ御涙はれかたき折しも命婦母君の御かへし
- 4 たてまつる御らんすれば
- 5 あらき風ふせきしかけの植しより小萩か本そしつつ
- 6 なき命婦はゝ君にもらひし手道具など御覽せさせ奉
- 7 れははうしがなき人の有さま尋て取かへりししのか
- 8 んさしならはいかに嬉しからんとおほへさせ給ふ御門
- 9 尋ね行まほろしもかなつてにても玉のありかをそこと
- 10 するへくと口つさませ給へり御いみ明て源氏内裏へ帰り給ふ年
- 11 月

(三丁オ)

- 1 に成給へは文はしめさせ給ふに何こともさとうおはして
- 2 琴笛の音にも雲井をひゝかせ給へり其ころ唐土より
- 3 相人わたれりすなはち源氏の相見せさせ給へはたゝ人
- 4 にて大やけの御うしろみせさせ給はゝ天下の「も」のとかならん
- 5 とそうしければさやうにせんとおほすさう人源氏の御
- 6 かたちをめてゝひかる君と名付し也とし月ふれと
- 7 更衣の事忘れさせ給はて似たる者もかなとたつね
- 8 させ給ふ先帝の四の宮よく似させ給ふと内侍の輔

- 9 といふ女房そうしければ御兄の兵部卿の宮におほせて
 10 御入内せさせ給ひて藤つほの女御といふあやしきまで
 11 更衣に似させ給へは御心もなくさむやうにおほすこの継

(三丁ウ)

- 1 母を源氏をさなきより御心にかけて給へり源氏十二に
 2 て御元服あり源氏のしやうを給はりて唯人に成給ひ
 3 中将にならせ給ふ御元服の時御ゑほし親に左大臣を
 4 めす此おとゝの北の方は帝の御妹也此はらに蔵人少将
 5 と云男子ひとり姫君ひとり有其姫君を源氏の北の方
 6 にかねて御されたためにて元服の夜左大臣の御もとへ
 7 源氏わたり初給へり此姫君を葵のうへといふ源氏とは
 8 いとことし十六にて源氏に四ツの御姉也源氏の里の
 9 御家を六条の院といふ内裏にては桐つほにおはします
 10 此巻に源氏誕生より十四五までの事みえたり

《異同》

※広島大学図書館蔵『源氏物語忍草』（版本）、『源氏しのぶ草』（写本）との異同を示す。仮名遣いの異同については原則採らない。濁点の有無は対象としない。版本の漢字に付された読み仮名は今回対象としていない。以下、本書の本文に対して異なる本文がある場合、函架番号をもとに『源氏物語忍草』を(A)、『源氏しのぶ草』を(B)として末尾に示す。

(二丁オ)

- 4 かきしか―書しは (A)
 5 大納言は―父大納言は (A) ちゝ大なこんは (B)
 7 宮つかへに―御宮づかへに (A)

10 依て―よつて (A) よつて (B)、更衣そねみ―更衣をそねみ (A)
 (二丁ウ)

- 5 かきしか―書しは (A)、三歳―三つ (A) 三つ (B)
 10 せんし下さる―宣旨を下さる (A) せんしを下さる (B) 此車―
 此てくるま (B)

11 ゆるしを給はず―ゆるさせ給はず (A) ゆるさせ給す (B)
 (二丁オ)

- 2 夜中―夜半 (A)
 6 暮し給ふ―くらさせ給ふ (A) くらさせ給ふ (B)

10 御やうたいをよく―御様躰よく (A) 御やうたいよく (B)
 11 手馴し―手なれ給ひし (A)、てなれ給ひし (B)
 (二丁ウ)

2 給ひし―給ひ (B)

- 5 植し―かれし (A) かれし (B)
 6 させ奉れは―さすれは (A) さすれは (B)

7 有さま―ありか (A) ありか (B)
 8 おほへさせ給ふ―覚させ給ひて (A) おほえさせ給ひて (B)

10 源氏―けん (B)
 11 うつくしう―美しく (A)

(三丁オ)

- 1 何こともさとう―何事にも恵く(A) なに事にもさとう(B)
- 2 ひゝかせ―響かし(A) ひゝかし(B)
- 3 相見せ―相をみせ(A) さうを見せ(B)
- 4 天下の「も」―天下も(A) てんかも(B)
- 6 名付し也―号しけり(A)
- 7 似たる者もかな―似たるものもや(A) にたるもかな(B)
- 8 よく似させ―似させ(A)
- 10 御入内―入内(A)
- 11 更衣に似させ―こういにさせ(B)、継母―女御(A)
(三丁ウ)
- 1 源氏をさなきより―稚きより源氏(A) けんおさなきより(B)
- 2 給はりて―給はり(A)
- 3 ならせ―なさせ(A) なさせ(B)
- 6 にかねて―にとかねてより(A) にとかねてより(B)
- 8 いとこ也―従弟なり(A) いとことしなり(B)、ことし―歳(A)
とし(B)、源氏―源(A) けん(B)、四ツの―四つ(A)
- 9 御家を―御家をは(A) 御いへをは(B)、六条の院―二條の院(A)
二てうのりん(B)

三 本書の跋文―(参考) 『源氏しのぶ草』跋文―

本書には跋文があるが、次に示すようにごく短いものである。

此物語は人皇六十六代の帝一条院のきさき
後には上東門院と申奉る其御内の女房むら
さき式部といひしか作也ひかへの有事になそらへ
てなき事を作り八十二代の帝後鳥羽院
の御時より世にもはやしけるとなん式部
親は堤中納言為ときといふ人也

本書の跋文は六行である。『源氏物語』の作者紫式部の紹介にとどま
る。写真2に示すように、この後に続く文章はない。一方、「源氏物語
忍草」の跋文は、これよりあとに執筆の動機ともいふべき文章が続き、
その末尾に書名「忍草」の由来となる歌が掲載される。作者、北村湖
春が詠んだと思われる歌である。

そこで、広島大学図書館蔵『源氏しのぶ草』の紹介を兼ねて、下巻
の跋文を掲載し、本書の跋文との相違を確認しておきたい。

まず、『源氏しのぶ草』の書誌を示しておく。

写本二冊。縦二十六cm×横二十cmの半紙本。楮紙袋綴。題簽の大き
さについて、原装と見られる藍色無地の紙表紙に、縦九cm×横五cmぐ
らいの無地題簽を左肩に貼り、「源氏志のふ草上」「源氏志のふ草下」
と外題。見返しは本文共紙。一面十一行書き(上巻に十行書きの面も
ある)。巻名は本文より四字ほど下げて記す。和歌は本文より二字ほど
下げて記す。下の句の末尾から本文が続く。墨付、上巻一一七丁、下
巻一〇九丁。虫損、シミが数か所ある。表紙見返しに「広島文理科大
學圖書之印」「広島文理科大学圖書」の蔵書印がある。函架番号は「大
国2274」(モノ源30B)である。

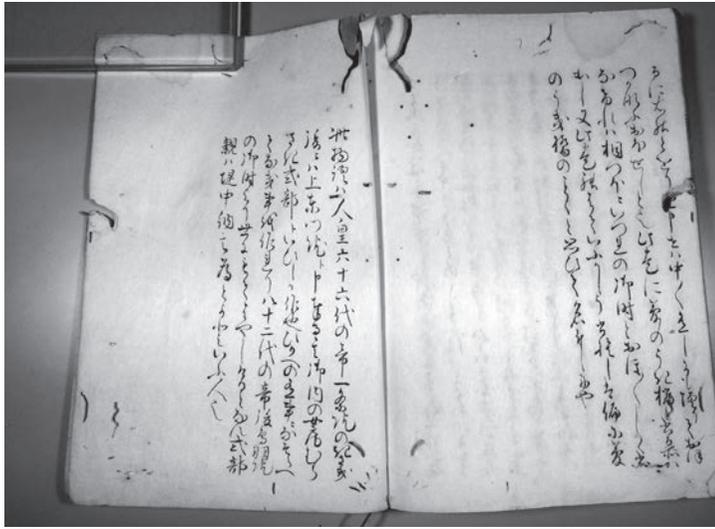


写真2：広島大学図書館蔵『源語しをり』第四冊 跋文（左面）

上巻桐壺から藤裏葉、下巻若菜上から夢浮橋である。上巻・下巻とも、はじめと間に目録があつて、上巻の間の目録に「夏」絵合から藤裏葉、下巻の間の目録に「冬」橋姫から夢浮橋までという構成となっている。目録が中にあるので、実際には四つに区切られたものである。それを二冊の体裁にしているものと思われる。

次に『源氏しのお草』跋文の翻刻を示す。——で消された箇所があり、その傍らに書かれた文字を「」に記す。

《翻刻》『源氏しのお草』跋文

※底本のまゝを原則とした。丁数・行数を私に付した。

(一〇七丁才)

- 1 此物かたりはにんわう六十六代のみかと一てうのあん
- 2 のきさきのちには上とうもんゑんと申奉るその御うち
- 3 の女はうたちむらさきしきふといひし女のさく也
- 4 ひかへ有事になそらへてなき事をつくれり八十二代
- 5 のみかごとのはのゑんの御時よりよにもてはやし
- 6 けるとなんしきふおやはつゝみ中なこんためときといふ也
- 7 小かゝみむげだひ十てうけんしなとなをことのはえ
- 8 んになまめきてその道にうとき人のためにはくも
- 9 りしかゝみのかけあきらかならぬ心ちすればよるの
- 10 にしきとはいはんその心の行やうにちりはかりつゝ
- 11 かきつけよとせめてきこえ給ふめるはをのへうぢの
(一〇七丁才)
- 1 なにかし也いわけなきそのかみより此物かたりにしう
- 2 ふかくてからふしてもとめ出たれといましめたまふ
- 3 心をしとせん外にはいかにととふへき人もなしつみ
- 4 なくてみるはいしよの月は心有人のをかしうする
- 5 事なれと木のはしいしのかけにひとしき身
- 6 にはなかむるかひなく心にくもり春ののとか成そらに

- 7 あそふいとゆふをくり返しては夏ころもうすきむ
 - 8 とへに心をいたましめ秋風にほころふるふちはかまならねときりくすのいさめにつゞりさすわさのいと
 - 9 なみにいたつらにくらす時しもなければ心やすくう
 - 10 ち見るほときへ有かたかれとざりと中「とて」心のくしぬる
- (一〇八丁才)
- 1 なくさめにはもてるはりの行ゑをわすれて心さし
 - 2 ふかくそめてしおりければきえあへぬ雪を花と見るほどの
 - 3 ひが心へは心へぬにしもあらねはいかてきはともいなひはてん
 - 4 一まきくの中のことたる所はかりを九つのうしの一す
 - 5 ちのけ大うみをこき行あまの小舟のかちの「二」しつくな
 - 6 れと十といひて五つ三つか一つのかすなれと「は」かき
 - 7 つけしほう中百にあま「れ」りかくてはこよみの心ちす
 - 8 れ今すこし大きにかきて見せよとの給ふ十とせ此
 - 9 かたはあつしう成ぬ其心ちむねさはきてふるへはみゝ
 - 10 すかきいとゝせんかたなけれとかの人の身のわさに
 - 11 やまひもなかは過てさはやき道くしきかたの物かたり
- (一〇八丁ウ)
- 1 にはまかれる心もなをくおほゆれはいかておろかに思ひ
 - 2 きこへん色みへぬころをいはかへてたにこそ見せま
 - 3 奉り給ひけれわれも此人ゆ「く」ためにはなきてを
 - 4 出してもはかりはちぬへき事かはと思ひをこし
 - 5 てわなゝきわゆけ「つけ」たるすみのあとといふかひなきもし

- 6 つかひはきくかひなきことはつゝきにはよくゆへつき
 - 7 てほ「ほ」ゝゑまるたゝひとりのきのつまにおふるくさ
 - 8 とみ給へそれをこそ此な「な」にもかり侍れかへすく
 - 9 ふく風もちらすな外にはつかしのもりのことのは
- (一〇九丁才)
- 1 かきあつめをく
 - 2 かたみともいはましものをしのふ草しのはれぬ
 - 3 へきわかみなりせは

本書の跋文範囲の異同を、桐壺卷の《異同》と同様に『源氏物語忍草』(A)、『源氏しのぶ草』(B)として掲げる。

《異同》

- 女房―女ばう達 (A) 女はうたち (B)
 いひしか作也―いひし官女の作也 (A) いひし女のさく也 (B)
 ひかへの有事に―ひかへ有事 (B)
 堤中納言為ときといふ人也―堤中納言の孫越後守為時といふとな
 り (A) つゝみ中なこんためときといふ也 (B)

本書の跋文の内容は、『源氏物語』の作者紫式部の紹介にとどまる。

四 短い跋文からの推測―執筆動機と「忍草」歌―

前項で示したように、『源氏しのお草』の跋文は、紫式部の紹介のあとも続き、この本を執筆するに至った動機を語る。『源氏物語』の梗概書に『源氏小鏡』『無外題』『十帖源氏』があるが、その道に疎き人にとつては難しい。尾上氏某の勧めもあつて、もつと分かりやすい書と思つて書き始めた。「十とせ此かたはあつしう成ぬ」と跋文にあるように、十年来病気が重くなつたことが語られる。そして、「かたみとも」と、この世の形見とも言うべき「忍草」歌が詠まれる。このような長い跋文がない本書において、「源氏物語忍草」という書名だけでなく、作者とされる北村湖春に結びつくことができない。本書の跋文が紫式部の紹介にとどまるので、書名に「忍草」を含まず、『源語しをり』であるのも不自然でない。

ところで、「源氏物語忍草」の成立が元禄初年（一六八八）頃であつたとされていることは前掲した。湖春が亡くなつたのは元禄十年（一六九七）であつた。成立から亡くなる年まで約十年間ある。西沢氏は「跋文から考えると、四十歳の頃にはほとんど病床の人であつたらしい湖春は、かかり付けの医師として親しくしていた尾上氏の懇望によつて、病気の小康状態の合間に、報恩のために書いて与えたのが『源氏物語忍草』であるとみられる。最後の「形見とも」の歌から察知できるように、もはや余命いくばくもないと考えた湖春が、形見に残し置くようなつもりで書いたものであつた」⁽⁸⁾と、跋文から「源氏物語忍草」の執筆の動機を推測している。

西沢氏の推測のように、湖春は四十歳の頃、形見とも言うべき「忍草」の歌を詠んだのか。形見として残す歌は、死の直前に詠まれる例が多いのではなからうか。もちろん、湖春死去の約十年前には病状が

重い日があつて、そのような心境になつたこともあつたらう。しかしながら、成立したとされる年から死去まで約十年間の年月がある。その間に、本人もしくは別の人物の手が加わる余地があつたことを考慮する必要がある。成立当初「忍草」歌の掲載がなかつたかもしれない。跋文に「忍草」歌を含まない本書からの推測である。短い六行分の跋文のみ有する本書において、執筆の動機を推測することはできない。執筆の動機を推測できる跋文が、のちの増補であつたという可能性が浮上する。

五 跋文掲載の仕方―異なるレベルの記載―

前項において示したように、本書の跋文の形態から「源氏物語忍草」には変遷があつて、その成立初期に長い跋文が存在せず、「忍草」歌を含まなかつた可能性を考えるに至つた。しかるに、本書は写本である。いうまでもなく、書写者が跋文を省略した、あるいは落丁したという可能性も当然考えられる。そこで、他本における跋文の掲載の仕方についても見ておきたい。本書の示す跋文内容を仮に「紹介」とし、その後の記述を「動機」と名付けて示す。

まず、本書の跋文は、写真2に示したように「紹介」のみで一面に余白がある。次に、写真3に安田女子大学図書館蔵稲賀文庫『游陽雑俎』辛集⁽⁹⁾の跋文を示す。この本の場合、「紹介」に続く「動機」がおよそ一字下げで記述されている。稽古有文館蔵「源氏物語忍草」⁽¹⁰⁾

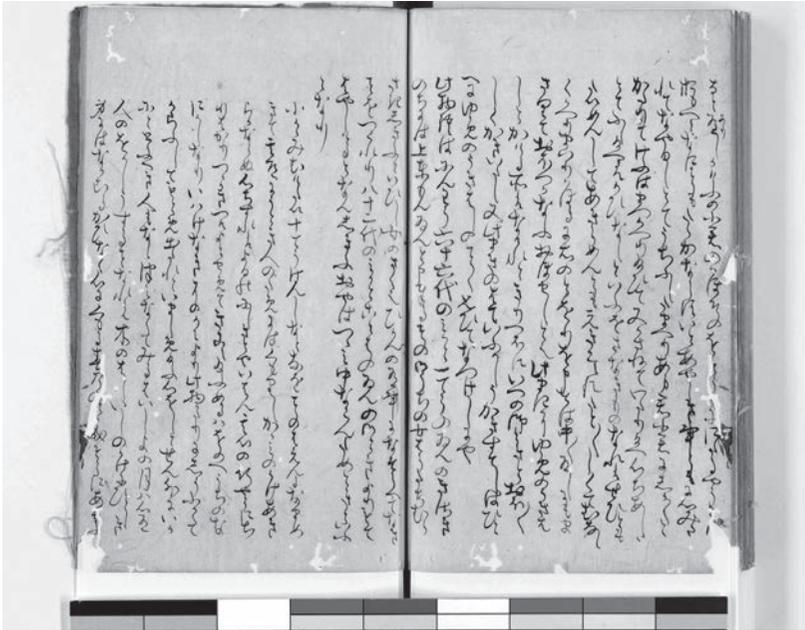


写真3：安田女子大学図書館蔵稻賀文庫『游陽雑俎』辛集（跋文）
（左面5行目より、およそ1文字下げで掲載される）

の場合、「紹介」が余白を設けて一面を使って掲載され、「動機」は丁を改め掲載される。そのほか、国文学研究資料館の新日本古典籍総合データベースで現在画像が確認できる写本のうち、相愛大学春曙文庫蔵本『源氏志のふ艸』（II）では、「紹介」と「動機」の間に一行分

の空きを確認した。

一方、『源氏しのぶ草』（写本）や『源氏物語忍草』（版本）は、「紹介」と「動機」が並列して掲載されている。しかし、『游陽雑俎』辛集、稽古有文館蔵『源氏物語忍草』、相愛大学春曙文庫蔵本『源氏志のふ艸』の掲載の仕方を見ると、「紹介」と「動機」は、必ずしも同列に扱ってよい跋文ではなく、異なるレベルで掲載されたと見ることができる。

表1：広島大学図書館蔵「源氏物語忍草」巻の区切り

書名	『源語しをり』	『源氏しのぶ草』	『源氏物語忍草』
写本/版本	写本	写本	版本
冊数	4	2	5
巻の区切り	桐壺—濔標	桐壺—関屋	桐壺—明石
	蓬生—梅枝	絵合—藤裏葉	濔標—御幸
	藤裏葉—雲隠	若菜上—竹河	藤袴—若菜下
	匂宮—夢浮橋	橋姫—夢浮橋	柏木—総角
			早蕨—夢浮橋

合わせて、巻の区切りについて触れておく。書誌の項で前掲したように、『源氏しのぶ草』は二冊の写本であるが、中に目録があつて、桐壺から関屋、絵合から藤裏葉、若菜上から竹河、橋姫から夢浮橋までという区切りとなっている。『游陽雑俎』辛集は一冊であるが、中に目録があつて、巻の区切りが『源氏しのぶ草』と同じである。しかし、本書は、桐壺から濔標、蓬生から梅枝、藤裏葉から雲隠、匂宮から夢浮橋という区切りとなつてい

る。ほかの写本の巻の区切りと異なる構成となっている。巻の区切りにおいても、写本流布期において変遷があったことが確認できよう。

おわりに

以上、広島大学図書館蔵『源語しをり』の本文内容が、「源氏物語忍草」であったことを紹介した。しかし、本書の書名は「源氏物語忍草」とは異なる。また、跋文が紫式部の紹介にとどまるごく短いもので、書名「源氏物語忍草」の由来ともなる「忍草」歌が含まれていない。さらに、巻の区切りも他の写本とは異なる構成となっていることを示した。

本書の書名や跋文、巻の区切りにより、「源氏物語忍草」の版本刊行に至るまでの写本流布期に変遷があったことがうかがえる。本書は、その写本流布期の初期の形態を有している可能性があるだろう。

注

- (1) 位藤邦生氏編『広島大学蔵 古代中世文学貴重資料集 翻刻と目録』（笠間書院、二〇〇四年）所収「附属図書館中央図書館貴重資料室蔵書目録」をもとに調査をした。『源語しをり』は、新制広島大学以後の蔵書である。本稿において掲載の写真は閲覧の際、私に撮影したものである。
- (2) 写本『源氏しのぶ草』（二冊）は旧広島文理科大学以来の蔵書

である。このたび、広島大学図書館よりデジタル画像の提供を受けたが、一部閲覧によってデジタル画像の不明な箇所を補った。

- (3) 版本『源氏物語忍草』（五冊）函架番号「大関875」（モノ源30A）は、旧広島文理科大学以来の蔵書である。第五冊目の巻末に「金花堂蔵板目録」「日本橋南通四町目 須原屋佐助」六丁分の目録が付された版である。この版について、中西健治氏「源氏物語忍草の写本・刊本について」（『源氏物語忍草の研究』和泉書院、二〇一一年）に言及がある。
- (4) 池田亀鑑氏『源氏物語事典』（東京堂出版、一九六〇年）に「元禄初年成る」とあり、西沢正二氏『早わかり源氏物語忍草』（桜楓社、一九八六年）に「元禄元年（二六八八）頃に書かれた」とある。伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）には、成立「江戸初期」とある。
- (5) 版本の刊行年について、中西健治氏「源氏物語忍草の刊行年について」（前掲注（3）同書）に詳しい。
- (6) 中西健治氏「源氏物語の隠れた読み巧者―北村湖春のひと仕事―」（前掲注（3）同書）において、「源氏物語忍草」完成後公刊の日までを「空白の百五十年」と称されている。
- (7) 中西健治氏「源氏物語忍草の写本・刊本について」（前掲注（3）同書）において「地方にはまだ写本の形で伝わる本がある」と指摘されている。安田女子大学図書館所蔵稲賀文庫『游陽雑俎』辛集や原豊二氏が報告された稽古有文館蔵「源氏物語忍草」（『源氏物語と王朝文化誌史』勉誠出版、二〇〇六年）が、近

年地方から紹介された写本にあたる。

(8) 西沢正二氏（前掲注（4）同書）の「解説」より。

(9) 安田女子大学図書館稲賀文庫蔵『游陽雑俎』辛集（イナガ／＼0069／稲賀文庫）。この写本に関して、斎木泰孝氏「北村湖春

『源氏物語忍草』の写本と刊本」（「安田女子大学大学院文学研究科紀要」第5集、二〇〇〇年）の論考があり、桐壺巻および跋文の翻刻がある。また、安田女子大学図書館編『安田女子大学図書館所蔵稲賀文庫図録』（二〇一六年）にも掲載がある。広島大学図書館蔵『源語しをり』『源氏しのぶ草』『源氏物語忍草』は、貴重資料室に収められる前、広島大学文学部旧国語学国文学教室古代中世国文学講座の蔵書であった。広島大学教授稲賀敬二氏の目に留まっていたとのことである。稲賀文庫『游陽雑俎』辛集とともに、関連づけて考える必要があるだろう。

(10) 稽古有文館蔵の「源氏物語忍草」は、ADEAC株式会社のデジタルアーカイブシステムの「河本家住宅保存会・手銭記念館・島根大学附属図書館／山陰地域史資料アーカイブ」から閲覧した。（最終閲覧：二〇二一年二月二日）
<https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11F0/WJJS07U/3290515100/3290515100200010/mp010960>

(11) 相愛大学春曙文庫蔵本『源氏志のふ艸』は、国文学研究資料館の新旧日本古籍総合データベースから閲覧した。（最終閲覧：二〇二一年二月六日）

<https://kotenseki.ni.jl.ac.jp/bibliio/100232473/viewer/261>

【謝辞】

* 広島大学文学部二〇二〇年度後期「古代中世文学演習Ⅱ」にて、本書『源語しをり』が教材として取り上げられ、花散里巻までの考察が行われました。妹尾好信先生はじめ受講生に多大なるご教示をいただきました。

* 広島大学図書館より、版本『源氏物語忍草』（五冊）函架番号〔大図85c〕（モノ源30A）、写本『源氏しのぶ草』（二冊）函架番号〔大図274〕（モノ源30B）のデジタル画像のご提供を受けました。

* 安田女子大学図書館より、稲賀文庫『游陽雑俎』辛集（一冊）請求記号（イナガ／＼0069）のデジタル画像のご提供を受けました。

（かとう のぶえ、広島大学大学院人間社会科学研究科キャリア・

アドバンスメント・プロジェクト（CAP）研究員）